



支部だより No.146

日本山岳会京都・滋賀支部

2022年3月15日

五黄の寅年を迎えて

松下征文

コロナの蔓延状況に一喜一憂の2021年度でしたが、
またも今、コロナ6波にさらされています。(1月26
日現在) 一月末からは京都市も蔓延防止等重点措置の
適用となりました。

コロナウイルスに感染しないように生活を守り、山
行を続けていきたいものです。

私達もこの二年間コロナの感染を防いできました。
今までの感染予防でこれからの登山を考えて計画して
いけば恐れることは無いと思います。

昨年は本会員、友の会会員ともに活動が活発化して
きました。大きな夢を持った若者も入会しました。こ
れからシニア登山を楽しみたいという方も入会されま
した。2022年は多くの現役会員が幅広く山ライフを楽
しめる支部となるよう願っています。

近くの山々もたびたびの寒波で素晴らしい積雪とな
りました。会員の皆様も雪山を楽しまれた事でしょう。

若い会員を中心にクライミング、山スキーと活発に
なってきました。この流れを拡大していきましょう。絶
対に安全な登山はあり得ない事です、少しでも安全に
山登りが楽しめるようお互いに学んでいきたいものです。

山の本を読み、山の写真を見て、山の絵をかいて、
山の話聞き、山の文学に親しみ、知らない山を訪ね、
温泉に浸かり、山の幸を味わい、登り方を考える等々、
山という自然をいろんな形で楽しんでいきましょう。

120周年記念古道調査も鯖街道が終了しました。新
年度も新たな古道調査山行が始まります。一人でも多
くの会員に参加していただきたい。

山書会の蔵書を是非読んでください。蔵書リストは
ホームページにありますので是非見て選んでいただ
きたい。

シリーズ山行も計画されています。是非積極的に参
加しましょう。あなたの面白い企画山行も提案してく
ださい。

海外の山はまだ往復に困難が伴いそうです。アルプ

スやヒマラヤ等への計画も温めておきましょう。

五黄の寅の威力をもって新年度がより良い山日和と
なることを祈っています。

山歩会例会

高取山

橋本裕子

紅葉には少し間がある10月26日、奈良県高取町の
高取山583.9mを訪ねた。7:45近鉄京都駅前に全員集合。
Bさんの貴重なアドバイスで季節の格安一日チケット
を利用して橿原神宮で乗換え、壱阪山駅へ。駅前より
壱阪寺行きのバスを利用し、10分余で終点壱阪寺BSへ。
身支度を整えて、登山口のある峠まで車道を歩いた。
車道はこの先で城跡方面と吉野方面へ分かれているよ
うだ。

峠より登山開始。登山口には、[ハイキング道 高取
城跡約2.8KM 五百羅漢約0.2KM]の案内表示板。こ
の場所には他に三本の古い石柱があり、古くからの登
山道であったことがうかがわれる。標示にしたがって
左手山道に入り登りはじめる。道はよく踏まれて分か
りやすいが、近年の豪雨のせいもあってか、底がえぐ
れたり、段差が大きくなったりしている所もあり、み
んなで雲母坂を思い出すと笑いあった。一か所だけ谷
側が崩れて迂回の指示もあったが、総じて歩きやす
くよい道である。周りは杉と桧が混植されて、高く伸び
ているにもかかわらず、風通しよく、木漏れ日もふっ
て心地良いスタートだった。

登山口から10分程登ると小さな尾根が現れ、谷道と
尾根道の別れに「五百羅漢周回遊歩道」の看板が置か
れている。その尾根上の岩の表面にはびっしりと仏様
の姿が浮き彫られている。長い年月を感じさせるよう
に苔むしており、様々な姿勢で様々な持ち物を持って
おられるのだが、こちらに知識が無いせいもあって、
羅漢さんなのか阿弥陀仏なのか如来様なのか解らない。
しかしその数、その密度から、これらを刻んだ人々の

篤い熱意と信仰心が私達に迫ってくる。

丁度地元の人か、三脚を据えていた方が、分岐より谷側の道を登ろうとする我々に、尾根側の道にはもっと沢山の磨崖仏があると教えて下さったので、帰路は尾根道を下ることにして山頂、高取城跡を目指した。

山道を登ること 40 分程で峠から上がってくる車道に出会う。これを横切りすぐ左側山道へ。この入口には立派な石柱「史跡高取城趾」が立っている。ここよりは城郭内の標のようだ。石柱からは右手尾根上の八幡神社へ直登する道があるが、帰りのお楽しみにしてまき道を進み標高 600m の壺坂口門へ向かう。ここで再度車道に出会う。一般車はここまでらしい。車道を横切り、石垣に沿ってずんずんと進んで行く。案内の矢印に従い十三多聞、十五多聞と石垣の間を歩み本丸を目指して登る。進路は何処も直角に曲るようになっており、これぞ虎口というものかなと思い、石垣の立派さに感心、感服しつつ進む。廃城になって既に 150 年、櫓など何もなくなった平地に生えた木々は幹回り 5 ～ 6m、樹高 30m はありそうな大木に育っているものもある。いつの間にか石垣の隙間に根を張ったものは堅固なはずの石垣を崩れそうに膨らませたりしている。一見に値するみごとな石垣である。

高取城は、美濃岩村城、備中松山城と並ぶ日本三大山城の一つで、その歴史は古く南北朝の頃、南朝方の高取の豪族越智氏が都と奈良吉野を結ぶ要の峠に城を築いたのが始まりである。一時期信長の命により廃城となるも、豊臣秀長の家臣本多氏により近世山城として大改修され、天守閣・多数の門、櫓を連ねて要害堅固、同時に美しく芙蓉城と称された。本多氏が絶えた後、徳川の譜代大名植村氏が入城。14 代 234 年間居城とし明治の廃藩置県まで続いた城であり、現在も石垣、石塁は旧規模のまま残っている。

本丸、二の丸跡に東屋一つ、ともに良く手入れされていて広々とした広場だ。一段高いのは天守閣跡か？そこに高取山 583.63m の三等三角点。全員で記念撮影



高取城本丸跡にて

の後、360 度展望を楽しみながらの昼食。石垣の縁に腰を下ろすのは怖い程の高さなので、老人グループは自然に安全な中央辺りに三々五々場所を取った。北に大和三山、南西に特徴ある二上山から始まる葛城山脈など展望を楽しんだのち、往路を戻ることにする。途中バスをした八幡神社に詣で、史跡高取城趾石柱を左に見て五百羅漢周回遊歩道に戻る。

帰りは尾根道を取りゆっくり下る。下るに従い五体〇、十三〇、施無畏像、十一面尊〇、釈迦如来などと書かれた立札とびっしりと刻まれている仏様群。僧形もあれば如来様もと様々だが、一様に苔むしておられる。これら石仏群は現在山麓の壺阪寺が管理しているというので電話で尋ねた所、宗教的な背景がある摩崖仏とか、統一性のあるものではないといい、推察ではあるが、高取城が本格的な山城城郭に作り替えられた時、全国から集められ石工たちが命じられてか、望んでか、平安を祈って城への道程に彫ったものであろうということであった。登山口からの梵字のついた石柱も丁石ではないということであった。石仏群が小尾根に多く刻まれていたことから、尾根道は築城の頃からの古い道だったと思われる。

帰路、折角の機会だからと壺坂寺に立ち寄り、十一面観音菩薩を詣でた。このお寺が日本で最初の盲老人ホームが作られたということも初めて知った。インド政府から贈られた大観音のお顔のサイズに合わせたという眼鏡形を茅の輪くぐりのようにくぐって目の健康を祈ってお寺を辞した。

リーダーの企画で、気持ちの良い秋の一日、ゆったり展望と歴史を楽しむことができた。有難うございました。参加の皆様ありがとうございます。

実施日：2021 年 10 月 26 日（火）

参加者：中川 寛（L）、大倉寛治郎（SL）、宇都宮道人、
（友の会）京極明美、馬場信枝、橋本裕子

巨木探訪シリーズ

滋賀県甲賀方面

（自然保護部会 10 月例会）

中川 寛

今月の巨木探訪は、滋賀県甲賀方面。8:30 に四条大宮を出発し、京都東 IC から名神高速道路で竜王 IC へと向かう。

最初の巨木は竜王町杉の木神社の大杉。鳥居をくぐると箸目の入った砂利道が続く立派な神社であった。

由緒書きによると天暦元年（947年）創建で、祭神は天照大神とのこと。2本の大杉があり、樹齢1000年とのことだが幹回り4mとまだまだ元気な杉で、神社創建のころからあった杉という意味で1000年と云われているのか？

次は、水口町三大寺の日吉神社の御神木・ケヤキの巨木。飯道山の麓に位置するこの神社は、創建が白鳳年間と伝わり、安全祈願のため当社に参拝後登山すると良いとのこと。ケヤキは幹回り6mの古木で、樹齢600年だが根本には空洞があり、途中から折れた状態になっていた。

続いて訪れたのは岩尾池の一本杉。甲賀市甲南町にある静かな灌漑用ため池畔に立つ一本杉で、写真のとおり雰囲気のある古木だ。現地説明板では、幹回り4.7m、樹齢1000年とのこと。途中で折れており古木であることが分かる。

次に訪ねたのは甲賀市の岩附神社の夫婦杉。写真のとおり根張りの見事な杉で、根本で2本の大杉がくっついている。太い方の幹回りは5.5m、樹高38mと勢いのある見事な樹で、強い生命力を感じた。岩附神社は、延暦年間伝教大師が延暦寺を建立するに当たり、岩附大明神と名付け創祀し、木材の伐採並びに搬出の安全を祈ったと伝わっている。

続いて甲賀市甲南町上馬杉の油日神社の杉を訪ねた。この神社は「ゆうひ神社」と呼び、次に紹介する油日（あぶらひ）神社とは同じ字を書くが直接の関係はないようだ。大伴氏の遠祖とされる天忍日命（あめのおしひこのみこと）を主祭神とするとのこと。大杉は参道

石段の途中に立っており、幹回り7m、樹高30m、推定樹齢300年以上の堂々たる杉であった。

次は、甲賀の総社として敬われる油日（あぶらひ）神社の高野槇。油日神社は、霊峰油日岳の麓に鎮座し、ご祭神は油日大神（あぶらひのおおかみ）。平安時代の元慶元年（877年）に油日神が従五位下を授かったとの記述が「日本三代実録」にあり、これ以前から存在したことが確かな古社とのこと。室町時代に建てられた楼門、回廊、本殿は重要文化財に指定されている。お目当ての高野槇は、幹回り6.5m、樹高35m、推定樹齢750年の堂々たる巨木であった。本殿の囲い堀の中にあり、根本を見られないのが残念。ちょうど昼時で持参の弁当を食べることになったが、立派な神社境内で食べるのは憚られ、楼門の外で食べていると神官が来られてどうぞ中の回廊の椅子を利用して食事してくださいとのこと。やけに親切だなと思っていると、当神社に甲賀歴史資料館があるので見学しないかとの誘い。お断りする訳にもいかず、200円の入館料を払って見学した。甲賀町に関する文化財、古文書や生活用具、忍者の里らしい甲冑類などが展示されていた。寺院のものと思われる仏像や仏具なども多く、理由を尋ねてみると、同じ敷地内に寺があったが、明治の廃仏毀釈で寺が無くなり、神社で預かったものとのことであった。

続いては甲賀市土山町の田村神社の杉を訪ねた。田村神社の主祭神は坂上田村麻呂だが、こんな所にも祀られているのかと驚かされる。ここも中々立派な神社で、嵯峨天皇の勅願所として始まったとのこと。お目当ての大杉は、拝殿の裏にあり、幹回り6m、樹高



岩尾池の一本杉



岩附神社の夫婦杉

27mの勢いのある立派な杉だった。拝殿の横から可愛い三毛猫が出てきて、ミャーと挨拶をして近寄って来てくれ、ほっこりとした気分になった。

本日の最後の巨木は、甲賀市土山町の瀧樹神社（たぎじんじゃ）の天狗杉。瀧樹神社は古くより地主神を祭った古社で、ご祭神は速秋津日子神はじめ8神と多くの神が祀られている。拝殿の後ろに二社の立派な本殿が並ぶように鎮座する。一社は、文明2年（1470年）に鎮座した天満宮とのこと。敷地が広く、肝心の天狗杉が見つからず探していると、こっち、こっちと岡田さんの声。神社の裏手に御神木の杉があり、幹回り6.8m、樹高38m、樹齢は6～700年と立派な説明板に記載されていた。周り一帯はユキワリイチゲの群生地であり立ち入り禁止となっていた。

この日は多くの巨木に出会え、訪れたどの神社も立派で、甲賀地方の歴史の重みを感じることができた。

掲載した写真は、能田カメラマンが高級カメラで撮影したものである。

実施日：2021年10月28日（木）

参加者：山村孝夫（L）、岡田茂久、柏木俊二、方山宗子、
中川 寛、能田 成

歴史と文化の山旅

大江山(千丈ヶ嶽)

笠谷 茂

2020年度事業計画として鬼伝説で知られる大江山において企画した山の日記念講演、ファミリーハイク（一般参加募集）、広島支部との交流会がコロナ禍で中止となり、2021年度にスライドして計画を立てた。しかしながら本年度もコロナ禍を踏まえ規模縮小を余儀なくされる中、一般参加のファミリーハイクは中止としたうえで、歴史と文化の山旅のひとつとして日本の鬼の交流博物館における記念講演と千丈ヶ嶽への軽登山をセットにしたイベントを関係支部にも参加の声掛けを行い11月6日～7日（1泊2日）の日程で行う運びとなった。

1週間前の天気予報では、低気圧の通過に伴い雨の予想であったが、日が進むにつれ好天の予報に変わり、当日を迎えた。

11月6日（土）

13:00 全体集合；日本の鬼の交流博物館前

・京都・滋賀支部11名は3台の車に分乗し各集合場所

から出発。途中、東海支部の2名をピックアップし昼食後現地到着。広島支部7名は1台の車で無事到着。受付後、日本の鬼の交流博物館の展示を見学。

14:00～15:30 記念講演；日本の鬼の交流博物館研修室

・「大江山の鬼伝説」の演題で、京都・滋賀支部の八木透会員（佛教大学教授・民俗学者、世界鬼学会会長）による講演を実施。参加者に加え、交流館の職員も聴講。

・日本人にとって鬼とはなにかに始まり、大江山とその周辺に伝わる鬼伝説（日子坐王伝説、麻呂子親王伝説、呑香童子伝説）を歴史に沿って紹介いただいた。また、節分と鬼のパートでは、節分が平安時代に宮中で行われていた疫鬼を追い払う行事である追儺に由来することに始まり、目に見えないものであった鬼が鎌倉時代末期より図像化されはじめ、室町時代から江戸時代では能や狂言の中で人間が鬼になる様が演じられていくことなど、時代背景や心理的側面を交えご教示頂いた。そして最後に現代社会の中の鬼についての考察があり、質疑応答も含め多くの興味深い話を伺うことができた。

15:30～16:00 宿泊先である由良川沿いの大江山「あしぎぬ大雲の里」へ移動

18:00～ 夕食、懇親会

・感染予防対策の亚克力板がある中、参加者も意識し夕食、そして懇親会を楽しみ親睦を深めた。

11月7日（日）

7:00 朝食

8:15 大江山「あしぎぬ大雲の里」出発

・周囲は朝霧が残っており、雲海を期待しつつ昼食の弁当とお茶を頂き、4台の車で標高650mの鬼嶽稲荷神社に向け出発。神社手前の路肩スペースに駐車。

8:40～9:00 鬼嶽稲荷神社

・東には青葉山の双耳峰がのぞき、南には雲海が広がる穏やかな晩秋の朝のひと時。境内の足元は落ち葉の絨毯。準備を整え大江山登山（千丈ヶ嶽往復）に出発。ブナなどの落葉広葉樹の美しい自然林に続く整備された晩秋の登山道をゆっくりと進む。

10:00～11:00 千丈ヶ嶽頂上

・二等三角点（点名：千丈ヶ岳）を中心とした360度の展望が広がる広い山頂にて、記念撮影、大槻会員による三角点のお話、そして宿にて準備頂いたお弁当をいただき穏やかな晩秋のひと時を過ごし、往路を戻る。

11:40 鬼嶽稲荷神社着

12:00 解散

・第5波終息の時期に天候にも恵まれ予定したプログ

ラムを無事完了し帰途につく。歴史と文化を実感できるイベントとなった。

実施日：2021 年 11 月 6 日（土）～7 日（日）

参加者：京都・滋賀支部（11 名）

伊原哲士（L）、八木 透、大槻雅弘、幣内規男、
竹下節子、松下征文、駒井治雄、笠谷 茂、
中川 寛、杉本順之、
（友の会）牧野博史、安東勝浩
広島支部（7 名）、東海支部（2 名）、計 21 名



大江山（千丈ヶ嶽）山頂にて

健幸登山教室 8

冬山入門1 赤坂山823m

松下征文

健幸登山教室 7 に続き冬山を前にしてとの考えであったが、少し暖かい日となった。

参加者は申込人数 13 名であったが、当日 10 名の参加者となった。

マキノ高原温泉さらさ前に集合して出発前の説明をして、受講生に地形図を見てルートの概念を説明してもらう。毎回参加している会員は地形図に慣れてきたようである。

前回の蓬萊山では冬山の厳しさを感じてもらったが今日は暖かい。冬山気象のことを簡単に説明する。栗柄峠下の東屋で昼食とする。昼食と行動食等の説明を毎回行っていて天候によりどうするかも考えてもらう。

この周辺にはクロモジが群生している。先日聞いた話であるがシャネルNo.5 にはクロモジの成分が入っているとの事。

13 時過ぎに赤坂山山頂着。日本海はうっすらと見えているが白山方面は雲の中であった。

滋賀県の山には高压送電線が何か所もあり現在地確認に使える。スマホ地図アプリと共に有効に活用してほしいものだ。しかし、足元ばかり見ていたり、地形

図をしっかり見ていないと見落とす人が多いです。

下山は同ルートを降りて 17 時前に帰着した。

山行感想は梅影さんと仲井さんに書いていただきました。ホームページを開いてください。

実施日：2021 年 11 月 14 日（日）

ルート：さらさ前→マキノキャンプ場→登山道入口→東や→栗柄峠→赤坂山（往復）

参加者：松下征文（L）、村上 正（SL）、土井文雄、
真名子栄一、野村綾子、
（友の会）仲井照雄、宅間 仁、上野陽子、
牧野博史、梅影順子

巨木探訪シリーズ

滋賀県木之本・余呉方面

（自然保護部会 11 月例会）

岡田茂久

巨木とは昭和 63 年の環境省による「巨樹・巨木林調査」時に、胸高 1.3m での幹周 3m 以上を巨木として調査されたのが定義の始まりであるという。林野庁では幹周 10m 以上を巨樹と呼ぶ場合もあるらしいが、正式には巨木と巨樹の区別は無いという。しかし、中には圧倒されるような存在感と風格に、これは是非とも巨樹と呼びたい巨木が存在する。

新型コロナウイルスが一段落した感の 2021 年 11 月 25 日、やや気持ちに余裕を持って、滋賀県長浜市の木之本・余呉周辺の巨木を訪ねることが出来た。それでも車内ではマスクを着用しており用心に越したことはない。

四条大宮を 8:30 出発、秋空は晴れ渡りさわやかで気持ちが良い。大原から R367 を走り、いつも立ち寄る道の駅「くつき新本陣」で、採りたてのナメコとシイタケのバックを手に入れる。

マキノ町海津で国道から脇道へ入り「清水の桜」に寄り道。「アズマヒガンサクラ」という種類とか、幹周 6.4m、樹高 16m、推定樹齢 300 年以上という。枯死寸前とも見える老木であるが、傍の説明版に、昔、敦賀の殿さまが上洛の折々に、あまりの美しさに何度も振り返ったので「見返りの桜」とも言うことあった。（10:20～10:30）

国道に戻り、道の駅「マキノ追坂（おっさか）峠」で、今日の訪問先では食事場所が無いかもしれないと、昼食の弁当を調達する。（10:35～10:45）

まずは R303 号と R8 号の合流点西浅井町交差点を左折、西浅井町野坂黒田地区に幹周 9.5m、推定樹齢 600

年という「応昌寺」の「シラカシ」を訪ねる。だが、いくら探しても「応昌寺」が見つからない。結果は「応昌寺」は近年に無住寺となり、隣にあった「神昌寺」という寺に吸収されていた。「シラカシ」も見つかったが手入れもされず、雑木に覆われ崖縁にしがみつくように立っており、巨木探訪の対象としても見られないのか哀れな状態であった。(11:20～11:30)

続いて同じ地区にある推定樹齢400年、幹周7mという「赤ガシ」を訪ねるがこれも見つからない。山村リーダーが昔に訪ねて、立派だった記憶があるとのことでは存在は間違いない。黒田地区をワンダリング。そのうちに大変うれしい発見があった。この黒田地区は豊臣秀吉の幕僚で天下の知恵者、秀吉も一目置く戦国の雄「黒田官兵衛孝高」一族の出身地であるという。地区作成らしい看板と黒田氏舊縁の地という立派な石碑が存在していた。(11:40～11:50)

おりしも誘導中の観光ガイドに聞いたり、畑で作業中の人にも尋ねて「赤ガシ」は川向こうの同じ黒田地区に存在を確認。湖北地方に多い「野神さま」として大事にされているという。

黒田地区の「野神さま・赤ガシ」は、害獣侵入防止柵の立派なアルミ製門扉の奥に鎮座していた。周りは綺麗に整地されていたが、その割に案内は小さな手製の看板のみで、観光と地元の人々の信仰の対象とは温度差があるようである。参道沿いには椎の実、檜の実が敷き詰められたように無数に落ちていたが、鹿やサルはこの地区には出て来ないのであろうか。(12:00～12:25)

黒田氏舊縁の地の石碑のある公民館まで戻りベンチでランチタイム。(12:30～12:50)

午後は旧木之本町から八草トンネルを経て岐阜へ通じるR303に入り、川合から高時川沿いに遡上し、川合の佐波加刃(サワカト)神社に向かう。祭神は日子座王(記紀に彦座王)、長い石段を登ると社殿脇に「権

現杉」があった。環境省巨樹巨木林データブックで、幹周6.5m、樹高35mというが、多くの杉の巨木を見てきた目には、特別に異常な形や特に大径でない限り、直樹形の杉の巨木には感激感が少なくなってきたのは、せっかくの巨木には申し訳ないことである。(13:00～13:25)

次いで高時川沿いの県道をさらに北上。かつてダム建設計画で話題になった余呉町下丹生に幹周囲5.2mという「ケヤキ」を訪ねる。目標とした丹生神社には目的の「ケヤキ」は見つからなかったが、丹生神社社叢には幹周囲5～6mの杉やケヤキが10数本も群生しており、それなりに壮観であった。(13:35～13:50)

予定としては、この後に木之本町、長浜市、湖北町等の巨木を訪ねる予定であったが、すでに14時ということで次回に見送ることになる。

幸運にも帰途の県道沿いで目的であった「ケヤキ」を偶然見つける。樹高も低く手当されたような跡も無く、見捨てられたような存在であったが巨木であるのには間違いなかった。

旧北陸本線の柳ヶ瀬線であったR365に出て、県道との交差先の坂口地区で、意波閑(ハエ)神社、祭神は大鷦鷯命(大雀命=オオサザキ命=仁徳天皇)に立ち寄る。掃除をしていた地元の人は「オハヘ」神社と呼んでいた。本殿前の広場端に立派な杉があり、樹高40m、幹周6.5～7mで長浜市保存樹指定樹木とあった。この制札を見ると長浜市は巨樹等を「保存樹」として指定されている様子であるが、西浅井の「シラカシ」、余呉町下丹生の「ケヤキ」や丹生神社社叢の巨樹群も、市からは保存樹として認められていないようで、どのような指定基準によるのであろう。

それにしても長浜市には、佐波加刃(サワカト)神社、意波閑(オハヘ)神社、飯開(イビラキ)神社、意富布良(オホフラ)神社等の聴き慣れぬ変わった名の神社が多いが、社名の起源となる言語は何語だったので



西浅井町黒田地区の野神「赤ガシ」



余呉町下丹生「丹生神社」社叢の巨木群

あろう。古代から大陸への玄関口であった敦賀に隣接する湖北地方らしい。

往路を 17:00 過ぎに帰京したが秋の夕暮れは早く、町は既に夜の様相であった。

実施日：2021 年 11 月 25 日（木）

参加者：山村孝夫（L）、能田 成、柏木俊二、方山宗子、岡田茂久

山歩会例会

小塩山

中川 寛

山歩会例会が始まったのは 2012 年 4 月で、今年でちょうど 10 年となる。第一回はポンポン山、第二回は小塩山と京都西山からスタートし、10 月例会の高取山でちょうど 80 山となる。例会としては、新しい山に登り続けるのが望ましいが、私を含め参加メンバーの高齢化が進んでおり、気心が知れた仲間と山歩きを楽しむ山歩会を続けるためには、一度登ったことのある山も活動の対象に加えるのも良いかと考え、小塩山に再度登ることにした。小塩山はカタクリが群生していることで知られており、先日亡くなった若林忠男さんから 1 万本に 1 本しか咲かないという白いカタクリの花の咲く場所を教えていただき、見に行ったことを懐かしく思い出す。若林さんは西山一帯の自然を守る活動をしておられ、巡視員として見回っておられた。当時、大原野神社から正法寺の前を抜け、美しい竹林の中を小塩山に向かう「天皇陵道」は、風情のある道であった。しかし、10 年前に同じ道を小塩山に向かうと、工事の高速道路が立ち上がり驚いたことを思い出す。今は舗装された道をしばらく歩きやっと竹林にたどり着く。

当初、11 月例会は 30 日（火）に行う計画であったが、私をはじめ複数の参加者の都合が悪くなり、27 日（土）に変更して実施した。JR 向日町駅、阪急東向日駅から春日町までバスに乗り、自転車組も合わせ、10 名が春日町バス停に集合した。この日は、今年初めての寒波が予想され天候を心配したが、曇り空の中、9 時 30 分出発。大原野神社の鳥居経由で、京都縦貫道のトンネルの上を越える舗装された「天皇陵道」をしばらく歩き、たどり着いた竹林の自然道を登り始める。登山道は良く踏みしめられているが、枯葉が絨毯を敷き詰めたように積もっていて下りは要注意。やがて金蔵寺への分岐に着き一休み。小塩山の登山道は一本調子の登りが

続き、10 年前よりはゆっくりしたペースで頂上を目指す。小塩山の頂上には、NHK や NTT など多くのアンテナ塔が立っており、そこへ通じる舗装道路を横切り、やがて淳和天皇陵に到着した。参拝の後、ちょうど昼時となり御陵前で昼食を取った。小塩山には三角点が無く、天皇陵の裏手にある「小塩山 642 米」と書かれた標識の前で記念写真を撮り下山した。下山後大原野神社の紅葉を愛でるつもりであったが、天候も悪く、バスの時間もあり鳥居前から参拝し、春日町のバス停へと向かった。

実施日：2021 年 11 月 27 日（土）

参加者：中川 寛（L）、大倉寛治郎（SL）、上田典子、遠藤将一、西田 均、幣内規男、山口基継、（友の会）京極明美、川寄紀久子、馬場信枝



小塩山頂上にて

健幸登山教室 9

冬山入門2 蛇谷ヶ峰901.7m

松下征文

冬山入門にしては良い天気となりすぎた。

スマホ GPS アプリと 2 万 5 千分の一地形図を併用して、地形図を読みこなしてほしい。そのポイントは現在位置を知ることからである。途中の目標物は雪山でも位置確認に役立つ。

てんくう温泉駐車場から一般登山道を登る。山腹の木製階段の所は崩壊したため尾根を忠実に登る登山道が作られている。急な登りであるが景色が素晴らしい。

今までてんくう温泉から生き物ふれあいの里へ通じた赤い立派な橋がありましたが、今はふれあいの里も無くなりこの橋も通行止めとなっている。

山頂で展望と昼食を楽しんで同じ道を下山した。友の会の仲井さんに山行感想を書いていただいた。ホー

ムページにアップした。

実施日：2021 年 12 月 12 日（日）晴れ

参加者：松下征文（L）、村上 正（SL）、野村綾子、
松下征悟、今中三恵子
（友の会）仲井照雄、上野陽子

第5回 武奈ヶ岳の日

大久保 優

国道 161 号を北に走るとほぼ前方に山頂部が真っ白な比良山系が目に入り、おっと思わず声が出た。東の空には朝日が真っ赤に顔を出して気分最高！

午前 8 時、集合場所のイン谷口に参加者 8 人が集合、準備を整えて大山口へ向かう。

金糞峠付近の木々には昨夜からの雪が積もり、空は青く、風はなく、ゆっくりしたペースで登った。

大山口、かくれ滝、青ガレの下で小休止する。青ガレを過ぎた辺りから足下に雪が見られ、木々には雪が積もっていた。

金糞峠が近づくにつれ積雪が増え、峠では 2～3 センチあった。

びわ湖が一段と美しく見える。いつもの峠は風が吹いているので足を進めるのだが、珍しく穏やかやっただけで長めの休憩をとった。

奥の深谷源流の沢筋から木橋を渡り杉林を抜けてコヤマノ岳南尾根へと詰めた。コヤマノ岳に近づくにつれ積雪も増え足元が滑る。頭上からは太陽熱で溶け始めた雪爆弾の集中攻撃を受けながら木々の枝に積もった雪景色を堪能した。

コヤマノ岳山頂で昼食後、武奈ヶ岳山頂へ到達、約 20～30 センチの積雪があった。

晴天に恵まれ穏やかな山頂からは、沖島、竹島、竹生島、鈴鹿山系の山々、雪を被った白山も遠望できた。近年まれにみる眺望であり記念日に相応しい登山となった。

平日であったため山頂は貸し切り状態で記念撮影して下山開始。イブルキノ木場から八雲ヶ原、北比良峠よりダケ道を下山した。

武奈ヶ岳山頂 13 時 30 分、北比良峠 16 時、イン谷口には 18 時に到着した。

実施日：2021 年 12 月 14 日（火）

参加者：真名子栄一（L）、松下征文（SL）、大久保優、

松下征悟

（友の会）近藤憲司、滝本香織、尾形利香、
（一般）尾形基和

平日例会山行・忘年山行

吉兆山～桃山～沢山～ 沢ノ池へ

宇都宮道人

今年もこの季節がやって来た。普段の行動食、非常食に加え、前夜、忘年会用の食料をザックに詰め込み準備する。

9 時、京都地下鉄・北大路駅に集合、バスに乗り、鷹峯源光庵前にて下車。9 時 22 分、山行開始。くもりの予報だが、天候は良く、寒くもなく、風もなし。光悦寺の前を通り、古道・長坂道入口の標識のところを下り、東海自然歩道に出る。坂尻まで 1.3km の表示。談笑しながら川沿いの緩やかな登りの舗装道を西北方向へ進む。

当初の計画では、まず上之水峠から沢山をめざすことであったが、行程短縮を目論んで、吉兆山に向かうことになる。上之水峠の 500m ほど手前を左に入り、民家の中を通って山道に取り付く（標高約 230m）。はじめは整備された道であったが、やがて藪の道になり、掻き分けながら急な斜面を登る。暑くなりパーカを脱ぐ。登り切ったところで、ちょうど 11 時、休憩。山行を再開し、倒木など乗り越えつつ進むと、東方に比叡山、西方に愛宕山を望む。暖かく空気が湿っているようでほんやりとしている。11 時 35 分、吉兆山（470m）、到着。雑木林の中の山頂で展望はなく、三角点もなし。小さな手製のプレートが掛かっている。写真を撮り、桃山に向かう。

60m ほど急な坂を下り、鞍部に出て、すぐに登り返し、ちょうど 12 時、桃山（466m）に到着。ここも展望はなく、雑木林の中。プレートとケルンがそのことを示すのみ。来た道を少し下り、京都西部を見下ろす展望の良い場所で昼食。

霞がかかり、やはりほんやりとしている。

12 時 35 分、山行再開、沢山へ向かう。吉兆山の南側を巻いて進む。倒木や崩れたところがあり歩きやすい道とは言えないが、踏み跡はしっかりしている。ふたたび急な登りになり、13 時 17 分、沢ノ池と沢山の分岐に至る。少し休憩。空から明るさが消え、くもりの程度が進んできた。山行再開、尾根道をたどり、13 時 35 分、沢山（標高 516m）に到着。二等三角点の前

で万歳三唱、記念撮影。

往路を戻り、14時18分、沢ノ池に到着。時折、陽が射すもののくもり空、水面に波ひとつなし。雨が降り出す前にと本日のメインイベント、忘年会。池を眺めながら、各自持ち寄った飲み物と肴で、この1年を振り返る。そうこうしていると、管理人らしきおじさん二人近付いてきて、マダニがいるから注意するようにとのお言葉。死者も出ていると言う。ダニ媒介感染症のことを言っているのである。

15時、片付けて下山開始。小雨がポツポツと来て、水面に輪を作っている。ふたたび仏栗峠を通り、京都一周トレイルの標識を確認して鳴滝に向かう。しっかりした道ではあるが、崩れているところにやはり倒木もあり、慎重に下って行く。枯葉が大量に積もり、道を覆い隠しているところがあり、歩くに苦勞する。

16時も過ぎ、残り500mくらい、下の街の様子も望めるようになったところで突然、赤のテープで通行禁止の表示（標高約180m）。帰宅後、調べたら倒木のためとのこと。

右に直角に折れ、斜面を登る。16時35分、白砂山（標高268m）のプレートの掛かる平坦で展望のない頂に到着。その山を越し、北西側の谷に下りることになる。しばらく尾根を進み、急な斜面を下る。マークが付いていて道筋ははっきりしているが、足元は狭く不安定で周囲も薄暗くなり不安の感情を持つ。17時、いよいよ暗くなりヘッドランプを出す。川沿いに降り立ち、川を渡り、17時10分、林道に出る。林道を歩き、住宅街に出て、17時30分ころ、バス停・高鼻町に到着、大した雨に降られることもなく、この山行を終えた。下山時の難しい場面を、リーダーの冷静で的確な判断により、乗り切ることができた。しかし、もし私ひとりであったとしたら、どのように判断し行動したことかと帰路、思いを巡らした。（了）

実施日：2021年12月16日（木）

参加者：田中昌二郎（L）、笠谷 茂（SL）、
宇都宮道人



沢山山頂にて

山歩会例会

忘年山行・野山

中川 寛

今年の忘年山行は、忘年会会場に近い長岡京市の里山で三等三角点を訪ねることになった。点名「栗生Ⅰ」三等三角点（230.08m）で、地図上に山名の記載はない。

13時に阪急長岡天神駅に参加者9名が集合し、タクシーに分乗して山裾に広がる美竹台団地へ。文字通りこの辺りには竹林が広がっており、筍畑だった所を切り開き住宅が建設された。13:30 団地奥の登山口と思しき所から三角点を目指す。以前は筍畑だったのか踏みしめられた道が続くが、倒れた竹を乗り越え、潜って前へと進む。やがて竹林が終わり雑木林となり、踏み跡をたどって行くと、所々に目印のテープが見える。こんな里山にも同好の士が三角点を求めて来ているのかと感心しながら歩く。先の台風の影響か倒木が見られるが、伐採してそれらしい踏み跡が続く。14:20 三角点に到着。近くの木に「野山」と記した木札がかかっていた。地元の人はこの山を「野山」呼んでいるらしい。しばしの休憩と記念撮影のあと、西へと谷筋を下山する。踏み跡ははっきりしないが、所々にテープが散見され、やがて舗装された道に出た。ここから山の北側を巡り光明寺へと続く道があり、しばしのハイキングを楽しんだ。16:10 光明寺着。西山浄土宗総本山光明寺は、長岡京市の西山のふもと、栗生広谷にあり、法然上人が浄土宗を開宗するに当たり最初に念仏の産声を上げられた地と伝わり、上人の弟子となった熊谷次郎直実が上人ゆかりの地に寺を建てたのが光明寺の発祥とされている。私が長岡京に住み始めた五十数年前は訪れる人もほとんど無い穴場であったが、現在は紅葉の名所として有名になり、シーズンには1,000円の拝観料が必要である。

光明寺前からバスでJR長岡京駅に移動し、予定通り17時から忘年会で盛り上がり、来年からの山歩会につ



三角点を囲んで

いて語り合った。

普段身近に何気なく見ていた里山でも、結構面白い遊びができるものと妙に感心した一日であった。

日 時：2021 年 12 月 28 日（火）

参加者：中川 寛（L）、上田典子、遠藤将一、能田 成、
能田直子、幣内規男、
（友の会）馬場信枝、川壽紀久子（山行のみ参加）、
（会員外）中野陽花（山行のみ参加）

初詣山行

松下征文

今回は京都トレイル東山の日向大神宮と伊勢神宮遙拝所にてお参りし、山行の安全を願いました。

例年滋賀県山岳連盟加盟のやまっこと行っている初詣山行。今回は京都・滋賀支部の担当です。去年はコロナ禍で中止としましたが、本年も感染が広がってきており実施するかしないか直前まで上田潤三郎委員と共に随分悩みましたが、直会等はお供えのお神酒のみとし、広いお部屋で黙食という事にして予定通り行うこととしました。山ではコロナ予防の指針を守りました。何度も歩いた山道ですが、その時々で計画内容で楽しさは格別でした。

9:00 地下鉄蹴上前集合→ねじりマンボ→田辺朔朗博士記念像→日向神社にてお参り→伊勢神宮遙拝所にてお参り→七福思案所→南禅寺→12:00 順正にて直会→14:00 解散

実施日：2022 年 1 月 9 日（日）

参加者：安藤勝浩、今中三恵子、奥 克彦、大久保優、大槻雅弘、杉本順之、須藤邦裕、中川 寛、真名子栄一、村上 正、上田潤三郎、松下征文、（友の会）上野陽子、近藤憲司、田淵元子、田淵アレクサンダー豊、仲井照雄（やまっこ）今井康太郎、斎藤富司、藤堂 保、松本 敦、森岡雄二 以上 22 名

新年会報告

伊原哲士

日本山岳会京都・滋賀支部の新年会が1月12日（水）に南禅寺「順正」で開催された。当初の予定では1月19日（水）であったが、新型コロナウイルスの第6波が席卷する兆候があったので1週間前倒した。既に変異ウイルスのオミクロン株が巷に出没し始めていた。

近年は会員も高齢化で、総会と記念講演や新年会の街での行事しか参加されない会員も増えた。事務局には「新年会が楽しみだ」という声も寄せられており、悩んだ末に「感染症対策」をしっかりと設定した上で開催することにした。この困難な作業に対応してくれた南禅寺「順正」のスタッフの皆様には感謝したい。

テーブルは密を避ける為、対面式を中止して、部屋の周囲をぐるりと囲む形で配置していた。酒は提供しなかった。マスク会食を徹底した。恒例のオークションは中止した。

森栄司委員の司会で開会が宣言された。松下征文支部長の新年の挨拶。続いて齋藤惇生顧問の乾杯の挨拶。「新型コロナウイルスの蔓延禍の間隙を縫って様々な支部行事を遂行したこと」に感謝の言葉を頂いた。乾杯は齋藤顧問提供の日本酒でおこなった。本日の新年会の唯一の酒である。

順正の美味しい料理とノンアルコールビールとソフトドリンク。なによりも例年になく新型コロナウイルス蔓延禍の緩和期での新年会である。一息ついた或る委員が「お通夜みたい」と呟く。酒が出ないと、日本山岳会京都・滋賀支部の連中はかくも、おとなしい。虎が、借りてきた猫になった。

新入会会員の安東勝浩氏と妻の安東恵子氏が紹介された。ご夫婦で日本山岳会に入会された。紹介者は大槻雅弘委員。続いて友の会会員として新しく入会された上野陽子氏の紹介。大阪からお越し頂いた。三人の日本山岳会京都・滋賀支部での活躍が楽しみだ。

閉会の挨拶は、笠谷茂副支部長。「老若男女、多様な人材に応えられる様な支部活動の年にしたい」という挨拶だった。

その後、新年会参加者で新型コロナウイルスに感染したという話は聞かない。開催できて良かったと思う。新年会の前後、私は胃が痛く、胃薬を服用していた。コロナはもうこりごりだ。

実施日：2022 年 1 月 12 日（水）

参加者：浅原明男、安東勝浩、安東恵子、伊原哲士、

上田闊三郎、上野陽子、大倉寛治郎、岡田茂久、大槻雅弘、笠谷 茂、方山宗子、駒井治雄、齋藤惇生、酒井敏明、杉本順之、杉山イタル、杉山伸子、田中昌二郎、野村綾子、中川 寛、野田純一、幣内規男、松尾憲治、松崎大嶺、松下征文、真名子栄一、森 栄司、森山寛一、山田和男、山内孝文、山村孝夫、八木 透、矢野正明、山根 猛 以上 34 名



松下支部長挨拶



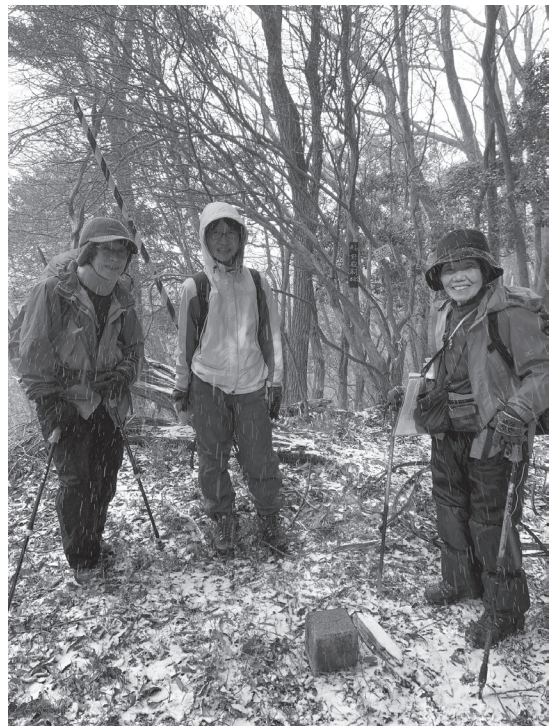
平日例会山行

クノスケ 586m

上田典子

京都府相楽郡南山城村の山城谷川の北、童仙房の南東にある、クノスケ 586m(二等三角点点名 野殿村)に登ってきました。

1月20日(木) 天気予報は「奈良でも降雪あり」の大寒らしいアナウンスメントであった。JR 関西線大河原駅に集合し、(8:31) こざれいで温かい待合室でリーダーのレクチャーを聞いて、山支度を整え、出発する。(8:55) R163 から北大河原で左折し、山城谷川に沿った府道に入る。国津神社を過ぎ、(9:10) 水道施設を右に見て、舗装道路をゆっくりと登る。目指す「六番」は、



雪の舞うクノスケにて

明治に入って「士族授産」を目的に京都府による開拓事業が始められた童仙房の当時の区画名ということだ。標高 500m 近い高原での開拓の仕事に、この道を上り下りした先人の苦労を偲ぶように、いわれはわからないが、道しるべが続いた。それは、「きんしろばたけ」「せとんころ」「うまざか」「だんごみつ」「やすんば」「ながさか」「よだんがえし」とあって、6 番の峠にたどり着いた。(10:30) 1 軒の家がある峠を右折して「7 番」へ向かう。いよいよ車道と離れてクノスケ登山の入口に着くころには、雪景色となり、(10:45) 雨具上下を着けて、SL の提案で地図の破線より少し北の地点から住居の間を抜けて、P559 を目指す。P559 (11:20) からクノスケ山頂までは、尾根筋のあちこちに巨岩が意味ありげに鎮座していて、興味深かった。山頂までの踏み跡程度のルートは、L と SL の GPS と読図のコラボで、マニアックな尾根道をクリアして、雪降りしきる山頂に到着したときは、思わずハイタッチをしあった。記念撮影の後、ランチタイム。(12:25～13:00) 見る間に白い世界になっていく、、、。山頂からの野殿への下山路はテープが沢山ついてた。このあたりの名産のお茶畑の峠に着いて、(13:10) 林道を下る。凍てついた弁天池 (13:25) から右折して東海自然歩道に乗り、30 分下った地点から旧道に入る。(13:55) 大河原駅へのショートカットである。この道もおそらく開拓に従事した人たちが使った道のように、今は使われていないのか、所々崩れていたり、落ち葉で道型がおおわれていたり、慎重に下った。足も疲れてきたころ、登りに見た「のどの橋」に着いた。(14:45) SL の提案で、

山すそを巻く道を取り、出発点の大河原駅に無事帰りついた。(15:00)

久しぶりに、「山を歩いた!」という達成感のある山行に参加できて感謝します。これからも、このような地図を見て山を見て、GPSを見て、山と一体になれるような感動を沢山の方々と共有して行けるような山行を次世代の方々に是非とも受け継いでいってほしいと願うものです。

実施日：2022年1月20日(木)

参加者：田中昌二郎(L)、今中三恵子、上田典子
(友の会)緒方由子(SL)

健幸登山教室 10

冬山入門3 伊吹山1337.3m

松下征文

冬山トレーニング山行として計画したが、積雪状況や激増するコロナ感染状況等で迷いましたが、実施しました。

当初は五合目周辺まで行かないとダメかなと思っていましたが、思ったよりしっかりした積雪で三合目手前にザックを下ろしてイグルスキー米山(東海支部米山悟)さんの薦めるイグルーを作りました。二班に分かれて約2時間で出来ました。松下班は少し大きく作り天井高も高く快適でした。五人が喜んで中で食事を始めようとしたが突然天井崩壊で五人とも足が埋まり動けなくなりました。手でブロックを外に投げ脱出出来ましたが反省しきりです。イグルスキーさんの言うように2~3人用にするとよかったようです。それならばこの**おもかる雪**であれば1時間くらいできそうです。村上班はもう少し小さくしっかりしたのを作り上げました。

その後、雪崩ビーコン、アイゼン、ピッケルワークについて入門講習を行いました。今後も続けていかねばなりません。

15時過ぎより小雨となり赤土ドロドロ登山道を嫌って舗装林道から下山しました。

山行感想は野崎貴子さんにお願ひしました。ホームページにアップ予定です。

実施日：2022年1月23日(日) 晴れ→雨

参加者：松下征文(L)、村上 正(SL)、今中三恵子、大和田篤、

(友の会)尾形利香、仲井照雄、上野陽子、野崎貴子

(一般)南 美幸、尾形基和

2021年 古道調査活動報告

古道担当 村上 正

3月：JAC本部提出用、京都滋賀支部推薦5選の調査開始

(滋賀福井)深坂古道、近江古道、(滋賀三重)千種街道、八風街道

(亀岡)唐櫃古道、明智越、米買い道、その他比叡山等々、文献・現状調査にて下調べをする。

3月：支部として第一回古道会議(活動発足)(於)長岡京市中央生涯学習センター

出席者：松下、幣内、伊原、中川、森、村上 6名
書面参加：岡田、大槻、上西 3名 合計9名

★以下は、第一次調査活動の範囲と参加者/個人を含む
5月1日から実質調査を古道委員会で、推薦古道候補の調査開始。

5月14日：近江古道大御影 (友の会)田中(紀)単独
4月初旬から6月：比叡、針畑越え、唐櫃越え、千種街道、米買い道、比叡仰木峠

村上 単独6回

第1回：6月12日 調査範囲 根来坂峠

小入谷⇄根来坂峠 村上、(友の会)今中 2名

第2回：7月10日 調査範囲 丹波越え

桑原⇄茶店跡⇄経ヶ岳⇄見後谷下降点の搜索
松下、村上 (友の会)米森、田中(紀)、今中 5名

7月11日 調査範囲 丹波越え 茶店跡調査
(友の会)米森 単独

☆8月：岡田氏に調査用の地図(調査ルート)作成の依頼と、これからの調査ルートについて話し合う。岡田、村上 2名

☆8月：公道調査 県道781号線(麻生・古屋・梅の木線)開通までの歴史と開通日を、滋賀県道路計画課及び森林事務所に問い合わせ等の事務調査。

(昭和35年7月に県道に登録) 村上

☆9月1日：JAC本部古道プロジェクトと京滋支部とでZOOM会議。

支部長、事務局長、岡田、村上 4名
第3回：9月19、20日 調査範囲 丹波越え久多側（泊り調査）

丹波越え 久多側（見後谷、倉谷）

19日：A班 経ヶ岳主尾根末端より倉谷周辺 笠谷、関本、土井

B班 見後谷ルートより経ヶ岳周辺調査 松下、村上（友の会）今中 合計6名

20日：倉谷末端→茶店跡→倉谷700m付近まで下降→経ヶ岳主稜線まで、上下を繰り返しトラバースしながら古道跡を調査。

松下、笠谷、関本、村上 4名 両日の合計10名

☆10月5日：根来坂GPS写真撮影と、山本・関本経由で紹介して頂いた民宿「古民家COCO小入谷」の廣清乙葉さんを訪問。

街道上の道路歩行の距離測定も並行して行う。村上

第4回：11月3日：調査範囲 丹波越え 桑原側と久多側を2班で調査

合流後、見後谷・倉谷間の700m～800m間をトラバース調査。経ヶ岳主尾根770mから下降。須藤、土井、今中、村上、（友の会）米森 5名

☆11月13日 福井支部30周年にて支部長の森田氏と話し合い、福井県境を跨ぐルート調査は京滋支部に任せてもらうことになった。

松下、幣内、伊原、村上 4名

☆当会の会計を担当して頂いていた野村（綾）さんが古道委員会メンバーに。

☆関本氏の紹介で、久多の古老に話を聞く機会が持てた。関本、須藤 2名

第5回：11月20日 調査範囲 久多以南

坊村より一台で久多オグロ谷林道に向かう。
オグロ坂⇔八丁平⇔フノ坂⇔二ノ谷 笠谷、竹下、村上 3名

第6回：12月5日 調査範囲 大見坂

百井車移動→小越⇔二ノ坂⇔車移動大見→大見坂林道→杉峠→百井

松下、土井、松下（征）、竹下、村上（友の会）米森、大窪、中尾 8名

☆12月5日：小浜やまの会の杉谷長昭氏に合い、情報を頂く。村上

以上、12月19日の調査を雪のために中止したが、事務、実働を合わせて延べ70名の協力を得た。JAC

京滋支部に係わる皆さんの調査協力により、鯖街道は事務調査を残すのみとなった。古道委員会として協力して頂いた会内外の皆さんにも併せて感謝します。

雪解けとともに近江古道の調査にはいりますが、楽しい調査活動を目指していますので今後とも調査協力を宜しくお願いいたします。

☆古道調査に係わった人数：事務活動延べ23名、ルート調査実動延べ47名

—JAC 京都滋賀支部：古道委員会—

寄稿

「東の鯖街道をさぐる旅」

・・・胸の鼓動は十八里

竹下節子

2021年11月20日（土）晴

参加者3名。坊村から車一台で久多まで走る。府道110号線久多下の町372m地点を左折して林道手前に駐車した。

「京は遠ても十八里」と言う最短、最古の鯖街道針畑越えの一里半をゆく。ルートは標高380m久多から⇨オグロ坂峠870m⇨八丁平800m⇨フノ坂峠840mを越えて二の谷・尾越へ降る分岐までをたずねる。行商人の往来や家康公も利用したと言われる鯖街道を想像すると胸が高鳴る。

9:00 最初は林道歩き。道は広くて歩きやすい。林道沿いに立派な古民家があった。茅葺だったのか急傾斜の屋根は改修されたように見えた。久多は茅葺の集落で知られていた。今は過疎化で人が住まなくなったそう。東へ200m若狭小浜と京都方面を標す鯖街道の道標が立っていた。その鯖の一文字がぴちぴち跳ねて今にも動き出しそうで面白かった。ここを右折して京都方面へゆく。久多川の支流に沿って4、50分歩いた所で林道が不鮮明になる。Kさんが地図を確認して「ここは林道終点じゃないなあ～まだ先！」林道が崩れているのか。荒れた林道は手つかずの自然に溶け込んで一つの景色を作った。上流から落ちる滝、苔むした石積みがある所では気持ちがザワザワした。当時の武将や行商人たちが立ち寄った場所なのか？歴史の遙か遠くを想像させた。

10:00 林道終点、道標が壊れて地面に置かれていた。ここから左の山道に入り三十三曲道の急登をゆく。オグロ坂峠まで高度差320mの登りになる。杉林の途中に何とも不可思議な杉の奇樹があった。家康公や行商人もこの奇樹を見たのだろうか？気になった。周辺は

美しいブナ林に変わり落ち葉の斜面になる。同時に倒木も増えて進む方向を処々塞いでいる。その中をひとり M 先輩は特徴的な地形で立ち止まっては周囲を観察し記録を取りながら登ってくる。「帰りにここを降りてみるわぁ」と、聞こえた。他に古道を見つけたのか？先に進む二人も視野を広げて歩いた。広葉樹林は晩秋には葉を落とすので見通しが利いた。永年踏まれて形成された古道は綺麗な U 字を保っている。カサカサと靴底から伝わる秋を感じながらその U 字を辿る。見上げれば残りの紅葉が青空に映えていた。11:15 鯖街道の中間地点、オグロ坂峠標高 870m に着いた。ここでおよその距離は一里。北は経ヶ岳周辺の山々が見えている。南へ降れば八丁平、西へゆくと峰床山、東へゆけば鎌倉山へと続く。私たちは南へ六尺道を降る。するとお地蔵さまの祠が道の左に見えた。罪深き人が許しを請うた場所だと言う。知っていれば手を合わせたかった。落ち葉の道が心地よい。15 分程で標高約 800m の八丁平に降りた。昔見た八丁平と随分変わっていた。登山道の右には防鹿柵が張られていて植生が守られている。寂しい限りの光景に驚いた。ここを通り抜けた武将や行商人たちの八丁平を見たいと思った。案内板や道標が多くなる。私達は八丁平南端ベンチ横の道標に従って峰床山、花脊方面に進む。小川の木道を西に横切ってフノ坂を登る。八丁平の高層湿原が見えた。何も知らないただの枯れた草原だ。ここは 3 万年前からの堆積物が山々や琵琶湖の環境を災害から守って来た。そう言う意味でとても大切な場所だ。12:15 今日の目的地に到着。フノ坂峠標高 840m を越え林道左へ 80m 先の二の谷・尾越への分岐を確認した。ここまで約一里半の道のりだった。

13:30 ランチをとった後、林道を東に迂回して八丁平南端へ戻った。ここから一里半元来た道を帰る。

朝の宿題は帰りに確認した。M 先輩の想定は「古道がずっと続いているように見える。そこも歩いてはるかも？降りて確かめよ！」だった。急な下りだ。私が遅れてついて行くと先輩が「あかん！道はない、落ちてしまう。」と残念ないきさつになった。古道発見はとても嬉しいが私は内心ホッとした。

15:30 久多へ到着 往復約 13km、所要時間 6 時間半が終了した。

<参考文献>

「小浜市史」338 頁参照

JAC 創立 120 周年記念古道調査事業の一途で参加しました。登山とまた違う興味と気づきを与えてもらいました。それは数々の素朴な疑問として残りました。



北⇐若狭小浜 京都⇒南



周辺観察と記録しながら歩く



地図確認「林道終点じゃない！」

●鯖商人への疑問

①季節ごとの服装、素材等 ②気候の変化 ③持ち物
④荷の重さ、量 ⑤運ぶ手段は？徒歩？馬 ⑥一昼夜
一睡もしていないのか？ ⑦食事休憩は？ ⑧女性も
鯖を運んだ？等々

●家康公への疑問

①甲冑をつけていたのか？ ②持ち物 ③移動手段
は？馬、徒歩？ ④単独？等々

これらの疑問についていつか調べてみようと思います。

短い道中でしたが有意義な一日になりました。
私の胸の鼓動は十八里、まだまだ巡ります。

実施日：2021年11月20日（土）

参加者：村上 正、笠谷 茂、竹下節子

図書紹介

山へ行けないなら本を読もう

竹下節子

令和4年1月23日のこと、日本中のオミクロン感染者数が尋常じゃない。まん延防止適用都市がまた増える。再び自粛になるのか？また山に行けなくなるのか？今年で3年目に入る新型コロナウイルス感染症の不安はまだ消えない。

ふと思いだした。平成30年年次晩餐会でのこと。小説家、夢枕獏氏の講演を聞いた。西遊記の三蔵法師こと玄奘三蔵が歩いた足跡を辿るためにシルクロードを訪れた話だった。詳細は割愛する。その「玄奘三蔵」の執筆を考えて26年になると話された。それから4年経ったので早30年だ。未だに執筆されていない。まだ構想を練り続けている。これが夢枕獏氏の完全無欠の執筆スタイルなのだと思った。優しい表情からとても想像できない。そういう経緯を思いだして今回ご紹介するやま本がふと閃いた。そのやま本は永年練り続けて執筆された「神々の山嶺 上・下」まさしく読み応えのあるやま本だ。読み終えて暫く呆然とした。・・・非の打ちどころの無い山岳小説だと思った。執筆を思いついてから書きあげるまで20年以上かけている。これが夢枕獏氏のスタイルだ。私が文章で紹介すると言葉が貧しくなるので、夢枕獏氏のあとがきを引用する。「書きあがった時には落涙、感無量であり、考えていたこと、書きたかったことは全て吐き出しました。力が足りなかったところ、力が及ばなかったところはある

ません。」「どうだ、まいったか。」と、あらんばかりの自信を記している。山に賭ける男たちのそれぞれの姿を完全無欠に描ききった山岳小説だ。読めばわかる。これ程の山岳小説が今まであったかどうか私は知らない。

それからその小説の登場人物、羽生のモデルとなった森田勝の生涯を描いた「狼は帰らず」を合わせてご紹介いたします。



題名『神々の山嶺 上』
—かみがみのいただき—

2014年6月20日 初版発行

頁数 541

著者：夢枕 獏

出版社：角川書店



題名『神々の山嶺 下』
—かみがみのいただき—

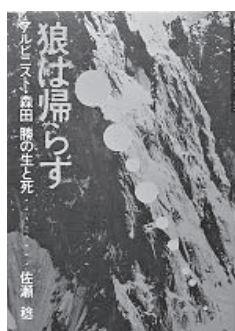
2014年6月20日 初版発行

頁数 601

著者：夢枕 獏

出版社：角川書店

◎お勧めです。是非お読みください。



題名『狼は帰らず』
—アルピニスト森田勝の生と死—

1980年第一刷発行

1998年第六刷発行

頁数 308

著者：佐瀬 稔

出版社：山と溪谷社

○「神々の山嶺」の後に読む方がいいと思います。

最後に夢枕獏氏の「玄奘三蔵」が出版される日が待ち遠しい。

史上最強の僧侶がどのように描写されるか楽しみだ。

図書紹介

山本紀夫著『高地文明——「もう一つの四大文明」の発見』

酒井敏明

1

この本は昨年6月中公新書として刊行されている。私が読んだのは新年になってから、おくればせながらご紹介させていただくことになった。ヒマラヤの高峰などに関心を持つ多くの方に読んでいただきたい好著である。

ヒマラヤやカラコルムの高地にガンジス河やインダス河の中・下流域にひろがる低地の大平原部とはことなる農牧的土地利用がみられ、特色ある文化をもつ社会があることが知られるようになったのはおそらく欧米の探検登山家たちがこれら辺境地帯に進出し始めた1870年代以降のことであろうが、本格化したのは20世紀になってからとみてよいかもしれない。日本人に限るならば大谷光瑞の第1次中央アジア探検隊（1902～04年）がその先陣を切ったと言っても大きな誤りではない。インド亜大陸の北辺に屏風をはりめぐらすようにとりかこんでそびえる広義のヒマラヤ・カラコルム山岳地域にかぎれば、第2次大戦勃発以前にこの地に入った日本人は合わせても十指に足りる程度で、日本山岳会が初めて送ったマナスル遠征隊（1952年、53年）に参加した科学者たちがネパールヒマラヤでおこなった活動が高地文明地域で学術調査をした最初の例であったといえるであろう。

著者は京大農学部を卒業、同大学院を終えて国立民族学博物館に就職、その後多年にわたり海外の高地社会の調査・研究を続けた人である。2007年同館を定年退任、名誉教授になってからもしばしば各地を訪ねている。学生時代に京大探検部に所属して、1967年南米アンデスを訪れたのが熱帯高地社会を訪れた最初の経験であったが、これが四大高地文明ととりくむ研究を長年続ける機縁になったと思われる。氏は温帯高地に発展したインカ、アマゾン低地の先住民、メソアメリカのアステカ・マヤなどアメリカの他の文化にも調査の領域をひろげ、のちにはヒマラヤ・チベット地域、東アフリカのエチオピア高原にまで対象は拡大したのである。

2

本書は全8章からなるがその中核部は、「ジャガイモが生んだアンデス高地の文明」(4)、「高地文明としてのインカ帝国」(5)、「チベットの高地文明」(6)、「エ

チオピア高地の文明」(7)の4章であろう。吟味された豊富な内容の個々について詳しく述べることは現地を訪ねた経験がない筆者には難しい。以下においては著者がもっとも長期にわたり力を傾注したと思われるジャガイモ農耕に基づくアンデス文明をおもに紹介するつもりだが、導入部3章についても簡単に触れておくことは必要であろう。

第1章「歴史教科書の記述は正しいか」では、日本の中学校高等学校の社会科において、メソポタミア、ナイル河、インダス河、黄河の大河流域を世界の古代四大文明として取りあげる例が多いことに異議を唱え、新大陸ではアンデスとメキシコの両高地に文明が栄えたことを無視するべきでないと論じている。あわせて人口が少なく単層的な小社会を文化と呼ぶのに対して、効果的な食糧生産を可能とすることに成功し、大きな人口集積（都市）ができた社会を文明と呼ぶならば、それは大河の存在とは直接結びつくものではないと指摘する。

第2章は「高地文明の発見に向けて」の表題をもち、論点は次の三つであろう。(1) 人間が長い年月をかけて動植物を自分たちにとって都合のよいように改変することをドメスティケーションといい、その結果生まれたものが栽培植物と家畜である。(2) ソ連の農学者ヴァヴィロフの研究によれば、地球上にある多数の栽培植物の起源地はその種が分布しているなかでも最も変異に富む地域に求めることができ、世界には次の七つのセンターがある。つまり熱帯南アジア地域、東アジア地域、南西アジア地域、地中海沿岸地域、アフリカ大陸、北アメリカ地域、南アメリカのアンデス地域である。このうちメキシコ、中央アンデス、エチオピア、そしてチベットからヒマラヤにかけての4地域は高地であることを共通の特色とする。(3) これら熱帯および亜熱帯の高地は（日本人の通常感覚とは異なり）居住環境として優れていて、そのために人が居住を開始した年代はいずれの地域においても相応に古い。現生人類が最終氷期終了後に初めて住みついた新大陸アメリカにおいても、中央アンデスにはインカ帝国成立を数千年もさかのぼる約1万年前に定住社会があったことがわかっている。四大河川文明とは別に四大高地文明があったと主張するのである。

第3章のタイトルは「それは雑草から始まった」であり、メキシコの大部分と中央アメリカ北部をふくむメソアメリカにおいては、考古遺跡の発掘調査から明らかになった1万年前からの動植物のドメスティケーションの変遷をこまかく分析し、先住民インディオたちは定期的に居住地をかえて季節的に移動する生活を長期にわたり続けたことがわかったと述べる。意識しないままに生活環境を改変し、雑草と呼ばれる新種の植

物を多種類作り出すことになったのである。これらの栽培植物のなかで最大の発展を遂げたものがトウモロコシであったという。イネ、コムギ、オオムギなど多くの主穀作物が旧大陸で栽培化されたのに比してトウモロコシは新大陸でつくりだされた唯一の穀物であり、食糧資源としての価値は大きい。栄養分も耕作方法も土地利用の在り方もことなる「トウモロコシ・マメ類・カボチャ複合」の3種類作物の組み合わせが特に重要視されることはよく知られている。

しかしながら氏はユカタン半島の低地森林地帯に多くの大神殿やピラミッドを生んだマヤ文明は本書があつかう典型的高地文明とはいえないとの理由で、次章においてみずから訪問・調査50回におよんだというアンデス高地をとりあげ、その地形、温度、降水量、動植物的多様性など環境上の特性を、多くの地図、図版、写真を援用して説明するのである。

3

さてこの第4章「ジャガイモが生んだアンデス高地の文明」では、最初にアンデス山系がほぼ赤道に近いコロンビア・エクアドル国境に始まり、南緯約53度のマゼラン海峡で海面下に没するまで約8000kmの長さをもち、北から南へ延びる世界最長の山地であることを説く。北極点から南極点までの子午線の長さは約2万kmである。アンデスは一直線ではなく北半が「く」字状に折れ曲がっているとはいえず子午線長の約4割に相当する。その途方もない長さをもつなかで南緯約7度のペルー領から約23度のチリ・アルゼンチン国境までの範囲を中央アンデスとよぶことが紹介される。この中央アンデスにおいてその南半部は東西幅約500kmを有して広く、2本の山系が並行して南へつらなる間に高度4000m前後のプナもしくはプーナとよばれる、傾斜のゆるやかな丘陵地帯または平坦な高原地帯がある。全体とすれば北から南にかけて、また東から西に向かうにつれて乾燥が激しくなる。1年は雨季と乾季に分かれ、湿潤プナでは半年におよぶ雨季のおかげで現地でイチユと総称されるイネ科草本が多い。古くからリヤマやアルパカというアメリカ特有の2種のラクダ科家畜の放牧地として利用されてきたが、この中央アンデスはジャガイモやトウガラシ、トマト、オカ、オユコ、ピーナッツなどなど、世界でもまれに見るほど数多くの栽培植物の故郷であることを著者は強調する。食糧作物として重要なことは主食となり得る、単位重量および単位耕作面積あたりのカロリーが高いものでなければならないが、中央アンデスでは穀類はほとんど栽培化されなかったのに対しイモ類は多種多様なものが栽培化されたことに注目する。ジャガイモ(ナス科)のほかに、オカ(カタバミ科)、オユコ(ツルム

ラサキ科)、マシユア(ノウゼンハレン科 以下科名略)、マカ、ヤコン、ラカチャなど日本ではほとんど知られていない多くのイモ類がふつうに栽培され食べられているという。

おそらく数千年におよぶ長期にわたり人々が周りの環境のなかから自分たちに役立つ植物動物をえらんで採集・狩猟して生活の糧とする世代がくりかえしつづけられるうちに、中央アンデス高地にとどまり(定着生活)、ジャガイモ栽培化に成功した人々が現れたと想像することができる。湿潤プナの標高3800mにあるティティカカ湖周辺一帯がジャガイモ栽培化の起源地であろうと氏は想定しているようである。

野生ジャガイモのイモは小指、せいぜい親指の先端くらいの大きさしかないから、より大きな個体をもつ種の選択がくりかえされただろう。しかもイモには本来有毒物質ソラニンがふくまれていて苦くて食べられないので、有効な毒抜き技術が開発される必要があった。乾季の6月頃は極度に乾燥し、また日中は気温が20度まで上昇するのに夜間は氷点下にまで低下する。この気候の特徴をたくみに利用しておこなう凍結乾燥法がもとのイモより重さも大きさも数分の一ほどに軽く小さくなり、貯蔵に堪え輸送が容易におこなえるようになった乾燥イモ、これはチーニョとよばれる。その作業は次のようだ。高原の野天にイモを重ならないよう広げて干し数日放置すると、日中と夜間の激しい気温変化のおかげでイモは夜間に凍結し昼間は解凍するプロセスをくりかえし、指で押しただけでも水分がふきでるほどやわらかく膨張してくる。このような状態になったイモを少しずつ集めて小山状にかさね、これを足で踏みつける。まんべんなくリズミカルに踏み続けるとイモから水分が流れでてゆく。脱汁したイモはふたたび野天に広げ数日放置すると、イモの水分はほとんど取り除かれ、有毒成分は水とともに流れでるわけである。

ジャガイモは紀元前約5000年に栽培化されたとみなされている。アンデス高地の人々は食糧採取民や狩猟民から食料生産者にかわる。ティティカカ湖周辺地域では盛り土農耕ともいべき高い畔をつくってジャガイモを栽培する集約農耕技術がはじまったことがわかっている。また地力低下をふせぐため連作せず1年1作をまもるなど、収穫性をたかめる農耕文化の発展があり、大きな人口を支えることが可能になった。チャビン文化(BC8～2世紀)、ワリ文化(7～9世紀)、など文化が進んだ形成期とよばれる時代をへてインカ文明(15～16世紀)が成立したとする歴史が復元されている。

農耕文化が発達し、人口の増加や余剰時間の増加が可能となり、それが政治や社会、経済などの発達をも

可能にしたのである。

4

ひきつづく第5章「高地文明としてのインカ帝国」ではアンデス文明が最後に花開いたインカ帝国はジャガイモ栽培による集約農業をその存立の基盤としたものであったことを論証する。

15世紀なかばにアンデス高地に成立していたいくつかの地方王国を統一するかたちでインカ帝国ができた。インカ帝国はアンデス文明の最後を飾る国であったが、およそ100年のちにコロンブスの「新大陸発見」に続いたスペイン人のメキシコおよびペルー侵攻があり、侵入してきたスペイン人の謀略にかかりインカ帝国は1532年に滅亡した。トゥパク・インカ王のころに標高3400mの山地に築いた首都クスコをはじめ、神殿、城塞、宮殿などを各地に建設し、国内に道路網を築き、太陽信仰をひろめるなどユニークな文明であったと評価されている。インカ文明には文字がなく、リヤマの毛からつくった紐に何本かの細紐を結びつけたキープという数字を記録する用具が発明され、最大1000万以上の人口と同数に近いリヤマ、アルパカ、ヒツジなどの家畜を管理することが可能になった。また、巨石を隙間なく積み上げて神殿や記念碑を作る石造建築技術がすぐれていたのである。

アンデス歴史学、考古学研究者たちのなかにはインカ文明はトゥモロコシ農業を切り離しては議論できないと考える人がいるが、著者はこの種の説には賛成できないとし、ジャガイモ栽培がこれを支えたのだとする論陣を張っている。氏はインカ人の後裔とみなされているケチュア族インディオが住む村を訪れ、長期にわたり滞在し参与観察し聴きとって得た情報を記録し、写真撮影をする。畑の農作業に参加し実践して親しく知識を身体化するとでもいうか、フィールドワーカーの原理原則に忠実であった。地理学、人類学、農学など専門研究者が発表した調査報告論文、スペイン人神父などが残した記録文書クロニカなど多くの文献資料を読み込んで得た知識などを動員して、著者はトゥモロコシ農業説を固守する学者たちに反論してやむところがない。

考古学、地理学、人類学、歴史学、生物学、文明論など多くの分野の専門家の著作や論考はひろく参照されている。直接原文をじかに引用する場合にも、また、参照した報告や論考に基づいて論証する場合にも、注記によって筆者名とタイトルは明らかである。新書版の一本としては数多く掲載されている地図やグラフ、挿絵、写真の類は読者の理解を助けるために有効であり、本書を皆さんにすすめる理由でもある。

5

第6章は「チベットの高地文明」がタイトルである。インド洋から吹きこむ湿ったモンスーンの気流は東西に高くつらなるヒマラヤ山脈によってほとんど遮断される。この結果、ヒマラヤ山脈の北側にひろがるチベット高原では降水量が少なく乾燥しているのに対して、その南側のヒマラヤ南面の斜面では降水量が多く、植物が繁茂している。こうして乾燥チベットと湿潤チベットに二分されている。本書は乾燥チベットだけがとりあげられているのだがスペースのつごうであったという。

チベット高原は冷涼乾燥のまことに広大な高原上にいくつもの山並みがつらなり、河川が流れ、大小の湖沼が散在する土地であるが、ヒマラヤ寄りの南部にヤルツァンボ河（ブラマプトラ河上流部の名）の谷平野があり、ここが農耕可能な地域となっている。おもな作物はオオムギの耐寒性の種チンコーであり、灌漑により栽培されるが、ダツタンソバなどソバ類は無灌漑で作る。家畜は低温につよいヤギや駄獣としてロバ、騾馬、ヒツジが飼養されるが、もっとも重要なのはウシ科のヤク（メスはナク）である。身体はウシよりひとまわり大きく、角も長大、ふさふさした長い尾と黒くて長い体毛が特徴である。体躯は強靱、寒さに強いが、3000m以下の土地につれてくると暑さに弱い。オスは運搬用にメスは乳用に飼い、乳からバター、チーズをつくる。さらに糞は肥料として畑にほどこされ、乾燥した糞は燃料として重宝される。特色ある作物は低温に耐えるチンコーとよばれるハダカオオムギが第一であり、鍋で炒ったあと石臼で製粉してツァンパとよばれる麦粉にする。ツァンパに水を加えてこねて無発酵のまま鍋で焼き丸く平たいパンにして食べる。ソバは低温でやせ地でも栽培される。

チベット高原に仏教が伝わった経緯は本書では説明されていないが南部のヤルツァンボ河谷平野にソンツェンガンボ王（581～649頃）が諸部族を統一して古代チベット王国吐蕃を建てた。

王は国内制度を整え強大な軍事国家の基礎を築いたという。ネパールから王女、唐太宗から文成公主が嫁ぎ、二人の妃は熱心な仏教信者であったため高原は仏教圏になった。仏教は8世紀末に国教となり、インドから高僧が招かれ、寺院が次々と造営されたという。吐蕃滅亡後仏教教団が各地に分立、大宗派サキャ派が強大になり、ダライ・ラマ5世が全土を統一、首都をラサと定めてポタラ宮を建設した。

チベット人の信仰の篤いことは有名であり、聖地巡礼、五体投地、寺院・僧侶の多さ、など、チベット族は宗教に生きる民族だということを著者は強調する。

チンコーとソバという特有の栽培作物、ヤクという

特有の家畜利用と生業経済が歴史的に広域で成立した地域としてチベット高原は一定の等質性をもつことを指摘し、さらにチベット系民族、チベット語とその近縁語、チベット仏教という文化の共通性が高原全体にわたって広く見られると述べている。

第7章「エチオピア高地の文明」では東アフリカにあり高原がひろがる内陸国エチオピアを取りあげている。北緯5度～15度くらいの熱帯高地が国土の主要部であり、歴史が古く民族構成が複雑で、ナイル河の東支流青ナイルの水源地であることぐらいしか普通の日本人は知らないであろう。早期に（1960年代）この国を日本に紹介した鈴木秀夫は、エチオピアは歴史、民族、文化において他のアフリカ諸国とは異なる独特な特徴をもつことを指摘したという。テフというアワより小さい穀物が主食であることは私も中尾佐助さんの『栽培植物と農耕の起源』を読んで以来承知していたが、この細かい穀粒は石臼で粉にし、発酵させてから土鍋で焼いてうすいパン状にして食すると説明されている。著者山本さんはエンセーテという高さ5mまで伸びるバナナに似たバショウ科作物の写真を載せ、葉柄基部に蓄えられるデンプンをかきとり、地中に埋めて発酵させてからエンセーテの葉につつんで蒸し焼きにして食べるという。エチオピア原産の作物にはほかにコーヒーがあり、この名はその栽培がおこなわれる地名カファに由来するものだ。シコクビエ栽培もこの国起源の作物である可能性があり、エチオピア高原は紀元前3千年～4千年にさかのぼる歴史をもつようだ。エジプトおよびアラビアとは紅海の水運によって長い交流の歴史があり、国の最北部の高原約2100mに立地したアクスム王国は階段耕地や灌漑、ウシを用いる犁耕作などで農業が盛んにおこなわれ、象牙、亀甲、犀の角、奴隷、黒曜石などの貿易で繁栄したとされる。アクスムが衰退したのち首都はのちに高原上をいくどか南に移動したが、おもな理由として周辺の森林資源が枯渇したことが要因であるという。

エチオピアは緯度からみて熱帯であり、雨はある程度降るが、低地は湿潤に過ぎて悪疫の心配があるので、高度帯による民族の住み分けがある。最大の人口を有するオモロ族のおよそ半数、2番目のアムハラ族、これにつぐティグレ族などはエチオピア正教の信者であり、オモロの半数、ソマリ族などはマスリム（イスラム教徒）である。

終章「大河文明説の見直しに迫る」を末尾に置いた著者は、中学生、高校生の若い頭脳に四大文明のような実証されていない議論をすりこもうとするリスクは避けて、自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の頭で考える研究者が育つようにしなくてはならないことを述べて、本書が少しでも役立つことを願っている。

ちなみに、著者は文部科学省から助成を受けた共同研究「熱帯高地における環境開発の地域間比較研究」代表者を務めた時期があり、編著『熱帯高地の世界』（ナカニシヤ出版）は氏をふくむ10人ほどの研究者が執筆を分担している。本書はこの編著が刊行されてから3年のち発表されたのであるが、著者の主唱する熱帯高地文明論をもっとも熱心かつ丁寧に説明し論議をかさねた業績であると考えることができる。

氏は日本山岳会から「アンデス・ヒマラヤにおける高地民族の山岳人類学的研究」により秩父宮記念山岳賞を受賞され（2006年）、本支部とは今西錦司先生を偲ぶ会に参加し北山荘で座談会で談話をうかがい（2005年5月）、『支部だより』86号に「ヒマラヤから見たアンデス」の寄稿文をいただいている。2010年7月にはガイド役としてアンデストレッキング隊に参加・案内をいただく便宜を受け、2013年4月には今西錦司賞を受賞していただくなど、お付き合いの機会を多くもつことができたことはありがたいことで、深い感謝をもってここに明記します。

中央公論社発行 2021年6月発行 新書判 336ページ
価格 1,155円（税込）

行 事 案 内

- ◇ 山行への参加申込は、例会名、会員番号、氏名、年齢、電話番号等、緊急連絡先および山岳保険の加入・種類など必要事項を記入の上、メール、または FAX、郵送で。
- ◇ 「★マイカー分乗」の山行は参加者の自家用車利用を予定しています。ご協力をお願いします。
- ◇ 思わぬところで遭難事故が発生します。車両保険と同様、また、ご家族のためにも山岳保険の加入は登山者の常識です。会員各位のご理解をお願いいたします。

日本山岳会京都・滋賀支部 2022 年度 (令和 4 年度) 第 37 回総会の案内

日 時：2022 年 4 月 2 日（土）
場 所：鴨沂会館 新館ホール（203 号と 204 号）
京都市上京区荒神口寺町東入ル荒神町
電話：075-231-1001
（市バス 3, 4, 17, 205 系統「荒神口」下車
西へ徒歩 1 分。京阪「丸太町」下車西へ徒歩
約 10 分。）

- ① 日本山岳会京都・滋賀支部第 37 回総会（午後 2 時～3 時 00 分）
2021 年度事業報告、決算報告。2022 年度事業計画（案）、予算（案）。
2022 年度支部役員（案）。「今西錦司賞」選考経過。
その他。
- ② 記念講演（午後 3 時 10 分～4 時 40 分）
講演 安間繁樹氏（2019 年度秩父宮山岳賞受賞者）
「人生を決めた西表島とボルネオ島の自然と人々」
- ③ 懇親会 台所「てんや」（午後 5 時～7 時） 懇親会費 4000 円
京都市中京区河原町通り蛸薬師一筋上ル東入ル 電話 075-212-8585
（阪急京都線「河原町駅」北へ徒歩 5 分）

※総会出欠ハガキの投函(63円切手添付)にご協力下さい。

(問い合わせ等)

日本山岳会京都・滋賀支部 事務局 伊原哲士

北山探訪

伊賀谷山 △ 900.5m（霞ヶ岳）

日 時：2022 年 4 月 12 日（火）
集 合：参加者に連絡
行 程：坊村駐車場→葛川学校前→・640→伊賀谷山→・899→八丁平→中村乗越→江賀谷→葛川学校前→下山
地 形 図：1/25000 図「花脊」
山行の目安：体力 3、技術 3
担当者・リーダー：笠谷 茂
申 込：4 月 3 日（日）までに所定事項記入の上、メールで担当者まで。

オークラノ尾 △ 826.3m（田歌）

日 時：2022 年 5 月 28 日（土）
集 合：参加者に連絡
行 程：周山街道⇒美山町江和⇒駐車⇒民ヶ谷林道→林道終点→・790→オークラノ尾頂上→往路下山
地 形 図：1/25000 図「中」
山行の目安：体力 3、技術 3 [注] 少々藪漕ぎあるかも
担 当 者・リーダー：八木透
申 込：5 月 19 日（木）までに所定事項記入の上、メールで担当者まで。

念仏△ 726.8m（Ⅱ 鶴ヶ岡村）

日 時：2022 年 6 月 25 日（土）
集 合：参加者に連絡
行 程：周山街道⇒美山町静原⇒砂木⇒安井谷川林道⇒駐車⇒口安井谷⇒送電線巡視路→・689→反射板ピーク→念仏頂上→・689→・649→・623→棚集落又は鶴ヶ岡集落に下山
地 形 図：1/25000 図「島」
山行の目安：体力 3、技術 3 [注] 少々藪漕ぎあるかも
担当者・リーダー：田中昌二郎
申 込：6 月 16 日（木）までに所定事項記入の上、FAX またはメールで担当者まで。

山歩会例会

竜王山 (586m) と山野辺の道

日 時：2022年4月26日（火）
 集 合：JR 京都駅 7時40分
 （7:52 発奈良行に乗車、奈良で万葉まほろば線に乗り換えて柳本駅 9:27 着）
 行 程：柳本駅→崇神天皇陵→竜王山→長岳寺・天理市トレイルセンター→山野辺の道→大和神社→長柄駅
 地 形 図：1/25000 図「初瀬」「桜井」
 山行の目安：体力2、技術2
 担 当 者：中川 寛
 申 込：4月19日（火）までに所定事項記入の上、FAX またはメールで担当者まで。

雪野山 (309m、I 等)

日 時：2022年5月24日（火）
 集 合：JR 近江八幡駅 9時30分
 （9:45 発竜王ダイハツ行バス乗車、川守バス停へ）
 行 程：JR 近江八幡駅⇒川守⇒龍王寺⇒野寺城跡⇒大岩⇒雪の山⇒浄土寺・天神社⇒川守⇒JR 近江八幡駅
 地 形 図：1/25000 図「日野西部」「八日市」
 山行の目安：体力2、技術2
 担 当 者：中川 寛
 申 込：5月17日（火）までに所定事項記入の上、FAX またはメールで担当者まで。

三嶽 (793m、I 等)

日 時：2022年6月28日（火）
 集 合：参加者に連絡
 行 程：県道301号の大^{タツ}嶮に駐車し、三嶽を往復
 地 形 図：1/25000 図「宮田」「村雲」
 山行の目安：体力2、技術2
 担 当 者：中川 寛
 申 込：6月21日（火）までに所定事項記入の上、FAX またはメールで担当者まで。

健幸登山教室

健幸登山教室 1

日 時：2022年4月10日（日）
 集 合：JR 湖西線志賀駅前 8:00
 行 程：志賀駅→中谷出会→大岩谷分岐→荒川峠→金糞峠→大山口→JR 比良駅解散
 地 形 図：1/25000 図「比良山」
 内 容：縦走、読図、唐松岳トレーニング
 山行目安：体力4、技術2
 担 当 者：松下征文
 申 込：4月2日（土）までに所定事項記入の上、メールで担当者まで。

健幸登山教室 2

日 時：2022年5月2日（月）～5日（木）
 内 容：八方尾根より唐松岳往復
 山行目安：体力4、技術3
 担 当 者：松下征文
 申 込：参加人数5名（会員、友の会）
 健幸登山教室冬山参加者優先。参加者3名以上で実施。
 4月10日（日）締切、詳細は参加者で打合せ。

健幸登山教室 3

日 時：2022年5月15日（日）
 内 容：北小松人工壁クライミング
 クライミングとロープワーク
 集 合：北小松げんき村ガレージ 9:00
 参 加 費：会員 1500 円 友の会、一般 2500 円、学生 1500 円
 担 当 者：松下征文
 申 込：5月5日（木）までに所定事項記入の上、メールで担当者まで。

健幸登山教室 4

日 時：2022年6月5日（日）
 内 容：金毘羅山にて岩場クライミング
 集 合：大原（参加者に連絡）8:00
 担 当 者：松下征文
 参 加 費：友の会 2000 円、一般参加不可
 申 込：5月20日（金）までに所定事項記入の上、メールで担当者まで。

巨木探訪シリーズ

(4月、5月、6月)

日 時：2022年4月28日(木)
5月26日(木)
6月30日(木)

担当者：山村孝夫

※行先、集合場所等については、担当者に問い合わせること。

テント泊登山の会

那岐山 1255m

目的の山域・山名：中国山地の脊梁上東部にあり、氷ノ山・後山・那岐山国定公園を構成する雄峰である。

日 時：2022年6月11日(土)～12日(日)
集 合：参加者に連絡
行 程：11日(土) 中国自動車道⇒美作IC⇒登山口駐車場 テント設営
12日(日) テント場⇒蛇淵の滝⇒大神岩⇒那岐山二等三角点 1240.3m⇒那岐山山頂 1255m⇒黒滝又は菩提寺⇒登山口

地 形 図：1/25000 図「日本原」「大背」

標 高 差：約 800m 登り実働：3時間程度

山行の目安：体力3、技術3

担 当 者：田中昌二郎

申 込：5月21日(土)までに所定事項記入の上、FAX またはメールで担当者まで。

「未知の山旅シリーズ」(第10回)

日 時：2022年 4月21日(木)～26日(火)

目的の山域：南九州

担 当 者：笠谷 茂

申 込：2月末をもって終了。

今西錦司レリーフの集い

北山直谷にある今西錦司レリーフを訪ね、清掃・補修作業を行います。

日 時：2022年5月8日(日)
集 合：植物園北門前 9時
行 程：植物園北門⇒中津川出合橋⇒滝谷峠分岐⇒今西錦司レリーフ⇒滝谷峠分岐⇒中津川出合橋⇒植物園北門

地 形 図：1/25000 図「周山」、「大原」

担 当 者：中川 寛

申 込：5月1日(日)までに所定事項記入の上、FAX またはメールで担当者まで。

春のスケッチ

天狗伝説の太郎坊山を描く

日 時：2022年4月22日(金)
集 合：近江鉄道太郎坊宮前駅 午前10時
担 当：山田和男
申 込：4月15日(金)までに所定事項記入の上、葉書、FAX またはメールで担当者まで。
なお、前日午後6時の天気予報で雨 50パーセント以上の時は中止します。

シャクナゲ山行

日 時：2022年4月29日(金)
集 合：イン谷口駐車場 8:00
行 程：駐車場⇒正面谷⇒シャクナゲ尾根⇒北比良峠⇒大山口⇒駐車場
地 形 図：1/25000 図「北小松」、「比良山」
内 容：山菜天ぷらとシャクナゲ鑑賞
山行の目安：体力2、技術2
担 当 者：真名子栄一
申 込：4月20日(水)までに所定事項記入の上、メールで担当者まで。
(参加費は人数で変わります)

歴史と文化の山旅

「高所集落遺跡から高座の滝」

兵庫県芦屋市に国史跡の「会下山(えげのやま)遺跡」があります。約2000年前の弥生時代の高所性集落で、縦穴住居跡・祭祀場跡・墓地などが発掘されています。低地で農耕していたのに何故、高所に集落があったのか謎です。そこから芦屋の高座の滝に行き、日本のロッククライミングの発祥の地を訪ねます。

日 時：2022年5月21日(土)
集 合：阪急電鉄・芦屋川駅 午前9時
行 程：阪急芦屋川駅⇒会下山遺跡⇒旭塚古墳⇒芦屋川水車場跡⇒高座滝(昼食)⇒ロックガーデン⇒藤木九三レリーフ⇒阪急芦屋川駅

山行の目安：体力2、技術1

申し込み・問い合わせ：伊原哲士

近畿二府4県の低山一等三角点を登る山行

この山行は、今年度新しく取り組んだ令和4年度の年間シリーズです。高齢の方も若い人も楽しく地図の原点である一等三角点を二府4県、6回巡ります。初心者の方には、地図の勉強を兼ねて歩きます。多くの方のご参加をお待ちしております。

低山一等三角点山行

第1回 兵庫県

城山（点名 志方城山 271.21m）

- 日 時：2022年4月10日（日）
 集 合：京都駅八条口 「都ホテル京都八条」（旧
 新都ホテル）前 8時00分
 行 程：八条口⇒南IC⇒加古川北IC（山陽自動車道）
 ⇒志方町岡 ㊦ →城山一等三角点（志方
 城山）往路帰洛
 地 形 図：1/25000 図「加古川」
 担 当 者：大槻雅弘
 申 込：4月1日（金）までに所定事項記入の上、
 FAX 又はメールで担当者まで。
 備 考：自家用車を利用しますので車の提供お願い
 します。高速料金、ガソリン代等参加者均
 等割負担。歩行時間目安、駐車場から城址
 40分。

第2回 和歌山県

コウノ巣山（点名 友ヶ島 119.71 m）

- 日 時：2022年5月15日（日）
 集 合：京都駅八条口 「都ホテル京都八条」（旧
 新都ホテル）前 7時30分
 行 程：八条口⇒上鳥羽IC⇒和歌山北IC（阪和自
 動車道）⇒加太港⇒友ヶ島→第一砲台跡
 /135度子午線標識 / コウノ巣山展望台 一
 等三角点 / 野奈浦広場⇒往路帰洛
 地 形 図：1/25000 図「加太」
 担 当 者：大槻雅弘
 申 込：5月6日（金）までに所定事項記入の上、
 FAX 又はメールで担当者まで。
 備 考：自家用車を利用しますので車の提供お願い
 します。乗船・高速、燃料代参加者均等割
 負担。定期船は港から30分 島内歩行時間
 目安、2時間30分。

会 務 報 告 支部役員会

第 430 回支部役員会

2021 年 11 月 10 日（水）18:30 ～ 20:30 於：鴨沂会館
出席：15 名 欠席：12 名

「報 告」

10 月、11 月に実施されたテント泊山行・赤兎山、山水会講演会、第 7 回健幸登山教室、山歩会・高取山、巨木探訪・甲賀方面、歴史と文化の山旅・大江山について報告。

支部長・事務局長報告

新入会員、友の会会員、逝去会員についての報告。
比良山系での遭難多発についての報告。

「計 画」

11 月に実施予定の山行計画について協議・承認。

「そ の 他」

10/27 に山行部会を開催し、2022 年度の山行計画の概要について協議。

古道調査の現在までの活動状況を報告し、今後の計画について協議した。

支部会員計報時の弔意の表し方について協議。

京都新聞掲載記事関連について報告。

新宮やまびこグループの今西先生関連の行事予定、伊吹山での雪崩遭難、会員の退会、入会について報告。

「計 画」

1 月に実施予定の山行計画について協議・承認。

「そ の 他」

古道調査の現状報告。登山計画届の支部ルールの周知についての協議。支部ホームページへの掲示板設置についての協議。京都新聞掲載記事関連について報告。

（中川 寛記）

第 431 回支部役員会

2021 年 12 月 1 日（水）18:30 ～ 19:00 於：「かがり火」
出席：15 名 欠席：12 名

「報 告」

11 月に実施された第 8 回健幸登山教室、山歩会・小塩山について報告。

支部長・事務局長報告

福井支部 30 周年記念式典が行われ、京滋支部から 5 名参加。登山研修所の安全登山研修会に参加。

会計委員報告

会費未納者の状況報告。未納者の納入を促す。

「計 画」

12 月に実施予定の山行計画について協議・承認。

「そ の 他」

古道調査の進捗報告。支部の図書として会員蔵書の受け入れルールについて協議。京都新聞掲載記事関連について報告。

第 432 回支部役員会

2022 年 1 月 12 日（水）17:00 ～ 18:00 於：南禅寺順正
出席：15 名 欠席：12 名

「報 告」

12 月に実施された第 9 回健幸登山教室、武奈ヶ岳の日登山、平日例会山行・沢山等、山歩会忘年山行について報告。

支部長・事務局長報告

＝ 次号 147 号 予告 ＝

2022 年 6 月 15 日発行 原稿締切 4 月 30 日(土)

原稿送付先 編集担当 中川 寛

＝ あ と が き ＝

一年ぶりに編集の当番がまわってきた。昨年は記事が減り、会報は薄くなっていた。それが今回は元に戻りそうな様子である。ワクチンや感染対策が進み、山行等の行事が復活してきたことも一因だろう。

来年度からは、近畿の低い一等三角点を巡ったり、ホームグラウンドの京都北山に新しい楽しみを求めた山行きも加わり、さらに活動が広がりそう。

会報は会活動の鏡。コロナの先行きはいまだ不透明だが、会報が厚みを増すことを期待したい。
(F.F.)

日本山岳会京都・滋賀支部会報「支部だより146号」

発行所 〒525-0072 草津市笠山3-6-6
松下征文方
日本山岳会京都・滋賀支部
発行者 松 下 征 文
編集者 福 田 文 夫
印刷 〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8
(株) 土倉事務所
TEL 075-451-4844 FAX 075-441-0436

ぐるっと京都、歩いてみませんか？

京都一周 トレイル

マップ&ガイド

全5コース・
14ルートを楽しむ

バス・電車からアクセス便利なルートを紹介！

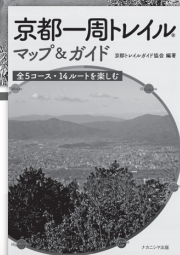
京都トレイルガイド協会 編

京都一周トレイル会



※本書の売上の一部をコース整備協力費として
京都一周トレイル会へ寄附します。

交通機関から歩きやすい14ルートに分けて
全コースをガイド！ 分かりやすいマップと、
コースレベル・コースタイムも掲載。
好きなところから自分に合った歩き方を楽しめます。



ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町 15 <http://www.nakanishiya.co.jp/>
電話 075-723-0111 FAX 075-723-0095

1,540円(税込)・A5判・144頁



【木津屋橋本店】

〒600-8248

京都市下京区大宮通木津屋橋下ル

営業時間：10：00～19：00

休 日：無休(年末年始および夏期)

1F/一般車
コーナー 075-341-7702

2F/スポーツ車
コーナー 075-341-7703

【久世店(オーダーフレーム工場)】

〒601-8205

京都市南区久世殿城町 162

営業時間：10：30～18：00

休 日：毎週水曜日・木曜日

TEL：075-921-8679

I FEEL THE WIND



The Japanese Alpine Club

日本山岳会

会 員 証

公益社団法人 日本山岳会
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4
TEL: 03-3261-4433 <https://www.jac1.or.jp/>



●旧会員証でも構いません●

日本山岳会 会員証のご提示で
店頭価格から御値引いたします！

※特価品・SALE 品は対象外です。
詳しくはスタッフまで！

取扱い
ブランド

gan well

ANCHOR

inelli

vittoria

HED. DOLAN

PINARELLO

LOOK

ANCHOR

SCOTT

FOCUS

Wilier

corratec

など